藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

同伴者は誰

大学を卒業して今年でちょうど五十年になる。東京では毎年、同窓会が開かれているが、この十年、一度も参加していない。数人の友から「今年こそ出て来い」と手紙や電話がかかる。今年は特に馬頭琴の第一人者の演奏もあるので妻を同伴してぜひにという。

日本大学芸術学部放送学科を卒業したのは昭和三十七年。その前後、全国各地で民間放送テレビ局が開設され、放送局に就職するため、ほかの大学を卒業したあともう一度放送学科に入学した者がかなりいた。次代の要請に応えるように開設された学部で、私はその一期生である。

ストレートで入学、卒業した私が七十二歳、友人の多くは私より年上である。五十年の節目、妻と一緒に上京した。

第一期生は確か百二十人。死去した人が十四人、今回の参加者十八人のうち奥様が亡くなった人三人、入院中の人などさまざまだ。改めて五十年という歳月の重さを感じる。妻同伴は私だけだったが、久しぶりに友と話しながら「人生の同伴者は誰か」と考えさせられる。ほとんどの人が配偶者と答えるだろう。その配偶者を失ったら誰が同伴者なのだろうか。

お世話になった梅光学院大学の佐藤泰正先生から以前、遠藤周作との対談集「人生の同伴者」という本をもらった。本棚からとり出し改めて読む。代表作「沈黙」などから真の人生の同伴者は神であるといわれるのが伝わってくる。

私が好きな詩、マーガレット・パワーズの「足跡」。

人生の最後を夢で見た。なぎさを歩いていると砂の上に二人の足跡があった。ところが今、一人の足跡しかない。私の人生で一番つらい時、一人の足跡しかない。「主よ、なぜ私を捨てられたのか」とつぶやく。と、主は「足跡が一つだった時、私はあなたを背負って歩いていた」と。

人生の同伴者が神である、それこそが信仰であることは一応洗礼を受けた者として理屈ではよくわかる。しかし、高齢となり現実に接する時、同伴者という言葉が重くのしかかる。

長く連れ添った配偶者の死、最近よく耳にする孤独死、同窓会で初めて知った、友のご主人がアルツハイマーであること、逆に奥様がくも膜下出血で、今は施設で車椅子の生活。毎日、その施設に四十分かけて通うという話に胸がつまされる。

他人事ではない。今、デイ・サービスに週に二回行く妻。もし私が買い物などに行けなくなったらどうなるのだろう。幸い、多少歩行困難でも今年はクルーズで三回、海外旅行を楽しめた。しかしクルーズ船が老人介護施設にかわるのも時間の問題かもしれない。

今年最後の巡礼記というのに暗い話になったが、決して希望を失ったわけではない。きょうは妻や友人と岩手の被災地に届けるため八十個のケーキを焼いた。この原稿が記事になるころは妻を娘に預け、被災地にいるだろう。

人生の本当の同伴者は神であると同時に互いに一人でも多くの人の同伴者であることだと思う。

一つ一つの出会い、別れを大切にしよう。そんな意味も込めて、この巡礼記を第一回からホームページに連載した。よろしければ「ふじやかんじ」で検索して下さい。

良いお年を!!

同窓会の目玉、馬頭琴の演奏

今年は３回、クルーズで旅ができたのだが…。